

フィリピンの民族マンギャン



フィリッピン活動に参加して

土 井 玉 男

最初に我々2名(西田^{西田}土井^{土井})はミンドロ島、マンギャン族調査を主体に行動したのであるが、その報告をするには余りに紙面が短かすぎることに後に報告書を出す準備をしているので、ここでは省き合宿全体についての感想を書くことにとどまることを、ことわっておきます。

フィリッピンとはどんな所だろうか、我々は今回の計画を諸条件において決定した時、実際どんなに不安に成ったか知れない、増して強盗、殺人等の話その中には常にフィリッピン人のザンギャク性を現わしたようなものばかりであったのが我々の心をより深刻なものとした。その心には次第にマンギャン族調査の主体性が自然にうすれて行き完全な偵察に終っても仕方ないという一種のあきらめ的な感情が入って来た事は当然と言えるだろう。今にして思えば、その時の感情を一笑にってしまう位のものでしかありえなかった。

しかし、それだからと言って完全に心を許せると思えば大きな間違いであるだろう。なぜなら実際今回程全てが好都合に行った事がなかったろう。我々の行く地点、地点において安全な人を紹介されたり、その地点で偶然にも見つかったり、そしてその人達の案内で我々の行程が何の問題も起ら

酒を作っている所

動物から守る事と、醗酵をよくする為、木の上にしぼりつけて作っている。その酒は目っぽく、にごったドロドロの様な感じで、味は少しすいみがかっているが、アルコール度は高く咽を通る時、焼けるような感じがした。

普通マンギャンは、酒を造らない。それだけに彼らは酒を造れる事に誇りを持っており、非常にその酒を大事にしていた。



採集物を焼いている老婆
女性に課せられた仕事は、食
料の採集である。

我々が、彼女の家を見つけ、
彼女に近づいても一べつも与え
ようとしなかった。手先だけを
動かして食物を焼いている彼女
の姿には、食物に対する何か、
執念というものが感じられた。

ずに進行したのであるが、その人々の口からは常
に危険だから自分達だけでは外をあまり歩かない
ようにしなさいという言葉であった。そして我々
が外出しようとするれば常について来てくれたとい
う状態であったからである。

我々が始めてマニラについたのが真夜中の12
：00であった。船上から見たマニラは夜のやみに
つつまれた黒い大陸の中を、美しい自動車のヘッ
トライドがいく筋となく流れている光景は不安な
我々の心をいくぶんなりともやわらせてくれるも
のであった。しかしその光景も船が岩壁に着くなり
一変してしまった。というのは、真夜中の全時刻
に赤いジャケットをきた何人というポーターが（
後で知ったのだが）むらがるようにして我々の船
にバ声をかけてくる。そして到着するなりせきを
きった様に船上になだれこんで来る彼等を見た時

には、その美しい光景など一度にふっとんでしま
った。

誰も迎えのいない我々を待っていたのは、何ん
とかして金をふっかけてぶんどってやろうという
ポーターでしかなかった。しかし我々の幸運はも
はやそこから始まっていたようだった、というの
は我々と同行した鈴木君という日本人の学生を出
招えに来ていたフィリッピン人が我々を彼の家ま
で連れて行って一夜の宿を貸して下さったからで
ある。そういう経路の上に我々のフィリッピンで
の生活が始まったのである。次の朝行っても仕方
ないだろうと言われるのを我々は3名で日本で予
約を取っていたマニラYMCAに行ったのである。
結果は良と出た、やはり我々の予約は届いていた。
そしてすぐOKをくれた。その交渉に始めて我々
の下手な仲々通じない英会話をし、そして英会話
の生活が始まったのである。

しかし日数が過るに従ってマニラの生活がいか
に快適であるかを知り始めた。最初腹がへっても
食事のまずさに食べあぐんでいた状態が、りまい
おいしいという感情に変わって行った。雨が一滴
も降らない猛暑にも慣れて来たのが加わった事も
原因であろう。しかしそれ以上に我々が日本にお
いて連絡しておいた人々にうまく連絡がとどき、
快く我々を招えてくれた事であった。増して関大
OBの吉田氏に偶然会った時には、関大生へのほ
こりと非常な喜びを感じた。そして次に我々の本
目的たるミンドロ島カンホセの出身の学生を日本
で依頼していたYMCAの人が紹介して下さった
時には天にも登る気持としかいい表わせないよう
な喜びであった。そして彼の家に泊らせてもらい、
マンギャン族の所にも案内してくれるという快情
報が次から次へと飛び込んで来た。

そして、出発準備をととのえて数日後ミンドロ
島へと飛び立ったのである。

第2回ミンドロ会議 10月28日(土)

フィリピン人は非常に人なつくく一度知り合
いになるとすぐ手をつなぎ肩をだき、そして腕を
つねる。それが彼等の友人に対する習慣らしく、
人なつくく笑いかけてくるその顔には一かけらの
苦悩もないかのようである。自然に慣れて来る生
活にも加えて熱帯らしい景色、バナナが黄色く大
きなふさを付けて実っている。そしてココナツの木は
その実をぶらりと幾個となく下げている、その景
色には何んとも言えぬ情調があり、そして他人
のものとは思えないムードを持っていた。増して
夕方太陽が沈んで行くその時にルネタ公園から見
るその景色の美しさは、その中をアベックが肩を
つなぎ散歩しているその姿に全く調和した何ん
とも言えないロマンチックさをたたえていた。

我々はミンドロ島の活動を終えた後、早く日本
に帰るアクアラングのメンバー2人(高橋、中柄)
を見送った。そして北ルソンへの旅が始まったの
である。YMOAより紹介状をもらい夜の12:
00過ぎにバギオ行きのオンボロバスに乗り込ん
だ。ガタガタと走る車の中は座る場所がない程満
員であった。しかし乗客の様子は日本でみる光景
と同じく色んなものを食べながら、ゆかいそうに
しゃべっていた。バギオには次の朝到着した。

右も左もわからないながらもたずねたずねて
ジブーにのりそしてバギオYMOAに着いた。
しかし満員のため近くのホテルを紹介してくれた。
安い代りに全くそまつなものであった。部屋は15
人部屋くらいで荷物を置く所もなく困った。

しかしその部屋が幸いしたのか我々は2人の友
人を得た。そして次の日からバギオを次々と見て
回った。一般にバギオは日本の国土によく似てい
ると言われているが、実際松の木と言ひ気候と言
ひ日本の5月頃を思わせた。ここは治安がよく行
きとどいて安全であるのをいい事にしてあっちこ
っちを歩き回った。しかし行く所行く所において
日本軍の話しをして聞かされた。そしてその時の
日本軍のザンギャク的な行為と日本軍が作ったと
いう数個の穴を示された。しかし現在その人々が
持っている感情は日本に対しての悪感情から次第
に昔話として移り変わろうとしている様子がその
人々の話の片端片端にうかがえた。

そしてその後日本人の平和部隊の人に偶然会っ
た。

そしてフィリピンの現状と彼等の仕事の内容
について色々聞き、そしてイモの目方測りも少し
だが手伝わせてもらった。

実際身に感じる程ではないがフィリピン人の
日本人に対する悪感情に対して相当苦勞しておら
れる事を知った。そして彼らも又日本人に対する
現地人の感情も次第に変わりつつあることを話し
てくれた。

そしてポントックサガタにおいても又日本人平
和部隊の方に色々世話になって我々の行程は安
全にそして幅広く進められて行った。

どい・たまお(文学部学生)

〇〇〇〇〇〇。

〇〇〇〇〇〇。